

文部時報

第 1058 号

昭和40年10月

* 座談会 *

産業教育80年の回顧と展望 2

(出席者) 土屋喬雄・矢島祐利・細谷俊夫

(司会) 河上邦治

技術革新と産業教育

農業教育 川延 謙造 25

工業教育 向坊 隆 33

商業教育 鶴澤 昌和 39

社会の高度化と産業教育 元木 健 47

後期中等教育における職業教育
職業訓練機関の役割と問題点 河上 邦治 54

産業教育教員の現状と諸問題 安養寺重夫 64

高等学校卒業者の就職状況と就
職する者のための教育 藤村 和男 73

適性能力の発見と進路指導 樋口 伸吾 92

* * *

フランスの職業教育 手塚 武彦 99

教育用語「産業教育」とは 河上 邦治 80

随 想「教育の効率」 井深 大 86

随 想 末綱 恕一 88

* 連載第四回 *

人物を中心とした特殊教育史 荒川 勇 106

文部省の会議・行事等から 82

文部省重要通達一覧 127



教育の効率

井 深 大

私は教育に関していろいろ述べるガラではなく専門家からみられたら何をくだらないことをといわれるかも知れませんが、私がしろうとはしろうとなりいろいろ違った角度から物をながめられるので、私の愚見を述べさせていただきます。

教育の本質などということは考えれば考えるほどむずかしくわからなくなりますが、私は今、話を簡単にするために教育をインプットとアウトプットの問題として考えてみたいと思います。つまりどれだけのものを人間に注ぎ込んで、それからどれだけのものを取り出せるかを考えよう

いうのです。

どんなものを、またどれだけのものをいつとり出すのか、場合によっては一生かかって取り出す場合もあり、アウトプットをそう簡単に測定はできないところにむずかしさはあるでしょう。

しかもインプットはそのままの形で出てくるのではなく、その人の創造が加わり、だいたいにおいてインプットよりははるかに大きなアウトプットを期待されるものです。

したがって、創造性をその人の中で育てることは、教育の一番大きな目的であり、極端ないい方をすれば創造性を産まないような教育は人間には無用と考えてよいと思います。

ところで今までの教育のあり方はどうもインプットの方論ばかり議せられ、いろいろな意味でのアウトプットの考慮が足りないのではないのでしょうか。

インプットとアウトプットを正確に考えてゆくと、どうしても教育の効率というものが問題になってきます。学力テストさえ大問題になる世の中ですから、効率などといったらどんなにおこられるかわかりませんが、教育もりっぱに一つの投資だと考えるべきです。

国にとっても大きな投資ですがそれ以上国民にとっても大きな投資です。したがって当然投資効率も考えなければならぬと思います。年間一兆五千億という巨大な費用が教育という名において使われていることは事実なのです。

一兆五千億がどんなに大きな金額かということはくどくどと述べる必要はないと思いますが、あかん坊から老人まで含めた日本人一人が年間一万五千円の教育費をつかっているということなのです。

此の巨額な費用と同時に莫大な時間が消費されているわけですが、これが日本の国にとって実質的にどれだけ有効な働きをしているかということを、冷静に考えなければならぬと思います。

一例をあげれば教育を受けるべき人が教育を受けられず、教育を受けずに世の中に出て働いた方ははるかに本人にとっても幸福であるべき人がやたらに無理をして学校を出て、かえって不幸になっているようなむだがいかに多いかを反省しなければなりません。

これらはすべて、学歴偏重、学校さえ出ればよいということがわざわいを作っているのでしょう。何々学校を出ているということだけが人間の資格価値判断のすべてになってしまう、それがどんな人であるか、何ができるかという

ことは二の次になってしまっている。学校別で価値づけを行なうことは非常に簡単な方法で、むずかしい個人の評価をしたり、評価の個人差が問題になったりせず、無難といえば大変無難ですが、此のイージーゴーイングが横行することが正しいきびしい評価を怠るようになってしまった最大原因のようにも思います。

そのために日本国民の学校あるいは教育に対する考えがみんな狂ってきてしまって、多くの人が苦しみ、不幸になり、大変なむだが行なわれているとしたらこんなつまらない非効果的な話はないでしょう。

日本人は教育のためとか、学問のためとか、研究のためという言葉にはきわめて弱く、お金を出す側ももらう側も何が重要で何が不要かということを深くきびしく考えずに、そういう言葉に無条件に参ってしまう傾向があります。そのために全体としては巨額な金もほんとうに重要なことがらに役にたつにはふじゅうぶんだということになるわけです。

此の場合の価値評価の基準を定めることは、大変むずかしいには違いありませんが、それにしても効率ということをまず第一に考えていただきたいと思えます。

(ソニー株式会社社長)

編集後記

★昭和四十年は、わが国に産業教育が制度として創設されておよそ八十年に当たる年であるため、この機会に産業教育発達の跡を振り返り、また同時に将来の発展を期する目的で、十一月には全国的な規模による記念事業が実施されることになっていきます。

本号もこれにちなんで、産業教育の特集とし、産業教育の意義と価値を正しい認識の視野にすえ、なお産業教育今後の発展に資する意図をもって、「産業教育八十年の回顧と展望」と題する座談会を開きました。経済史の土屋喬雄、科学史の矢島祐利、教育学の細谷俊夫の諸先生においでをいただきましたが、とくにわが国の近代経済史の展開過程で、産業教育がどのような役割りと成果をもったものであったのか、多角的な視点か

ら問題が浮き彫りにされていきます。

★産業教育あるいは実業教育というものが一般教育より低いとする偏見は座談会のなかでもふれられているように、わが国の近代史の過程に深く根ざしたのですが、こうした適念にわざわざいされ、産業教育は従来まで不振の状態にありましたが、昭和二十六年の産業教育振興法の施行を転機に発展の傾向をたどりつつあります。これは最近のわが国産業経済の驚異的な進歩、成長にも見合ったものと思われれます。

★とくに産業界から、ソニー株式会社社長井深大氏、ブリヂストン株式会社事務改善部長鶴澤昌和氏の両氏にこの特集のために原稿をよせていただきました。

MEJ 9467

文部時報 十月号

第一〇五八号

昭和四十七年十月五日 印刷
昭和四十七年十月十日 発行

文 部 省

所 著 権 有 帝 国 地 方 行 政 学 会

発 行 者 株 式 小 川 平 二

東 京 都 立 川 市 曙 町 三 の 五 五

印 刷 所 株 式 行 政 学 会 印 刷 所

東 京 都 新 宿 区 西 五 軒 町 五 二

管 業 所 株 式 帝 国 地 方 行 政 学 会 別 館

電 話 (268) 二 一 四 一 (代)

振 替 口 座 東 京 一 〇、〇〇〇 番

本 号 臨 時 定 価 百 円 (十 二 円)

講 読 料
定 価 一 冊 七 十 円
送 料 〃 六 円
一 か 年 八 百 四 十 円
(送 料 不 要)

ただし増大号、臨時号の場合は別に代金を申しあげます。なお購読の申し込みは、直接発行所またはもよりの書店にお願いします。